

全般円安、持続余地と調整にらむ

米銀不安、米欧の中銀会合、米指標と決算など焦点

今週の為替相場はドル/円とクロス円での円安・外貨高について、持続余地と反動調整やスピード調整にらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が135.30-138.80円、ユーロ/円は148.30-152.30円。前週は日銀政策会合での金融緩和維持や早期の修正観測後退などにより、全般的に円安と外貨高が後押しされた。今週は一部米銀の経営不安問題や米欧の中銀政策会合、雇用統計などの米経済指標、米企業の決算発表などが焦点になる。

日米株価、12カ月平均上向きでリスク選好

今週の為替相場で注目されるのは、一部米銀の経営不安問題だ。前週は米地銀ファースト・リパブリック・バンクの経営不安が再燃する一方、前週末からは「米連邦預金保険公社（FDIC）が売却先を決めて公表」、「買収合意が成立しない場合、FDICが公的管理下に置く」といった報道が見られている。

今週以降、買収合意などで一旦の不安後退となれば、米国株を始めとした世界の株高とリスク選好による円安・外貨高が支援されやすい。米国では3月からの金融不安に対し、FDICや財務省、FRBなどの当局による迅速な対応が目立っている。今回も早めの火消し策が好感されると、株高・円安が後押しされる。

一方で買収を含めた破綻回避策が難航したり、別の銀行に不安が広がるようなら、株安やドル安、リスク回避の円高という波乱余地が完全には無視できない。さらに根強い銀行不安により、米国内で銀行の貸し渋りや貸し剥がし、信用収縮に対する警戒感が一段と高まるようなら、先行き米国経済の悪化懸念が拡大。FRBの利上げ停止や利下げ転換などが意識され、ドル安や円高の圧力が高まるという潜在リスクも、可能性は低いとはいえ注意は要する。

今週の為替相場では、5月2-3日の米FRBによるFOMCが注目イベントになる。市場予想は0.25%の利上げながら、すでに織り込みは進んできた。焦点は今回の利上げで一旦の利上げ停止や、先行きの利下げの可能性などが示唆されるか否かとなっている。

米国での根強いインフレの高止まり警戒や、米国経済の底堅さ、銀行不安の現状限定などにより、「6月以降は指標次第」や「一旦は利上げ休止でも当面は政策金利の高止まりを維持」といったタカ派（インフレ警戒で引き締め重視）トーンが目立つと、為替相場ではドル高の要因となる。ただし、米国株が大幅安となるようなら、クロス円主導でリスク回避の円高・外貨安という可能性は無視できない。

一方、FOMCで「次回以降の利上げ休止」と「米国の経済と金融システムの健全性」が同時にアピールされた場合、米国株は上昇となる。その場合では「安全逃避通貨」であるドルと円が同時に下落。クロス円では円安・外貨高となるが、ドル/円はドル高限定や小幅なドル安という展開も想定される。

反対にFRBが先行きの信用収縮や景気悪化に警戒姿勢を強め、「今後のリスクに備えた次回以降の利上げ休止示唆」という、タカ派姿勢の後退なら全般的にドル安が後押しされる。その場合、米国株が上昇となれば、クロス円は円安か円高

限定へと作用。米国株が大幅安となれば、クロス円、ドル/円で全般円高という可能性も残されている。

リスク選好かリスク回避かの判断で参考になる日米の主要株価指数については、日経平均株価、米国のNYダウ、S&P500のいずれも、4月に月足テクニカルで12カ月（1年）移動平均線を上抜け維持となっている。同時に1年スパンのトレンド方向を示す12カ月平均の方向角度は、いずれも上向き化となってきた。各指数で12カ月平均の上抜けと上向き化が維持されている限り、為替相場ではドル/円、クロス円でリスク選好による円安・外貨高や、円高抑制の流れが支援されやすい。その他の注目ポイントは以下の通り。

<週足、ドル/円は5週平均の維持焦点>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円は3月10日週以降のドル反落を経て、3月24日週の129.64円前後を一旦の底値にドルが反発を維持している。

5月1日アジア市場時点のレート数値によると、「5週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンド」では、5週平均134.62円前後の上抜け維持が焦点になっている。上下動を経ながらも、上抜け維持している限りは、ドルの下限切り上がり基調が継続。週間ベースのドル上値メドとしては、バンド上限138.01円前後やその上の方向が視界に入る。反対に5週線などを完全に下抜けると、改めてドルの上値の重さが再確認され、バンド下限131.23円前後の方向へのドル安余地が意識される。

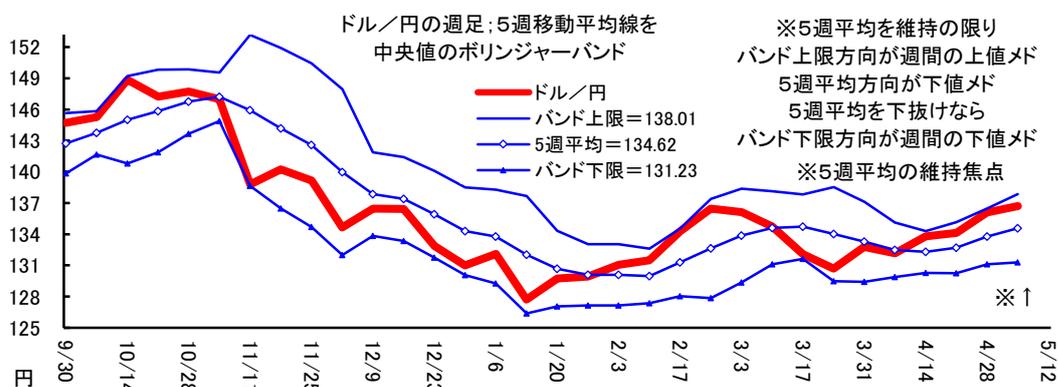
クロス円取引は2月後半からの外貨安・円高の流れが、3月24日週以降は外貨反発・円反落へと移行している。ユーロ/円、ポンド/円、スイス・フラン/円、カナダ・ドル/円、豪ドル/円、NZドル/円などでは、「4週や5週移動平均線の上抜け維持」が焦点になっている。上抜け維持の限り、引き続き外貨高の基調が持続。反対に根強い戻り売り圧力に押され、各ラインなどを完全に下抜けると外貨安の基調再開が意識される。

<ECB理事会、今後の利上げ予定焦点>

欧州市場では5月4日にECBが理事会を開催する。市場予想は0.25%の利上げ。すでに利上げは織り込まれているものの、4日にかけては「今後の利上げ継続示唆」の可能性などがユーロの押し目買い要因となりやすい。

一方で実際の利上げ後には、一旦の材料出尽くしなどでユーロ下落の可能性もある。同時に先行きの利上げ休止の可能性や、インフレの上昇ピークアウト示唆、先行きの景気・金融問題への懸念などが示されると、ユーロ安が後押しされる波乱余地も無視できない。反対にインフレ高止まりへの警戒感や、当座の利上げ継続が強調された場合、上下動を経たあとにユーロ再上昇の可能性もある。

なお、4月28日のブルームバーグはエコノミスト調査の結果として、現状の予想中心は「5月4日に0.25%の利上げ。6月と7月も各0.25%の利上げ。7月に中銀預金金利を3.75%として、そこから利上げ停止。早ければ10月に利下げ転換」



という見方を伝えている。

＜米国の経済指標＞

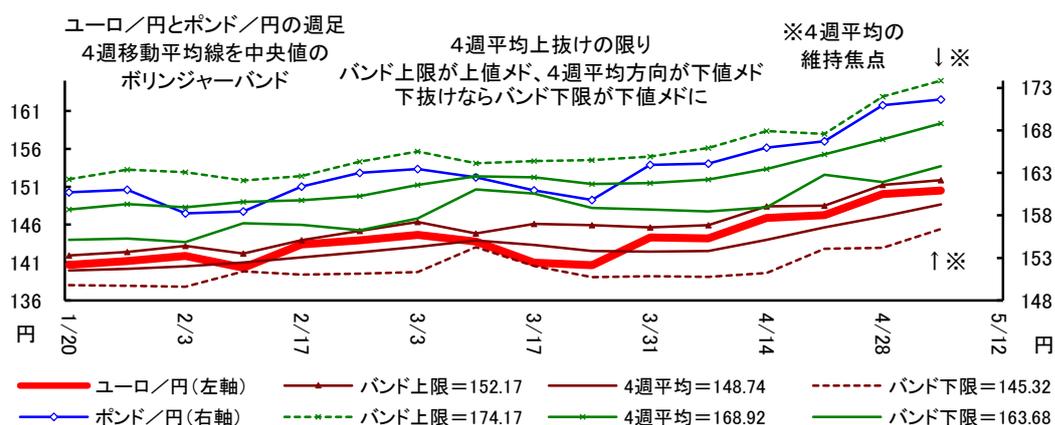
米国市場では今週に重要な経済指標が相次ぐ。最近の米指標は強弱混在となっており、今週も一喜一憂の可能性はある。今週は金融不安や利上げ打撃などで下振れが警戒される指標として、2日の耐久財受注、3日のPMIとISM非製造業景況指数などがある。

3日のADP雇用統計や5日の雇用統計についても、「利上げ1年経過」の運行効果などで減速が警戒される。ただし、雇用統計のほか、PMIやISMといった「最新4月指標」については、3月指標が金融不安打撃で下振れとなった反動や、各種物価高騰の一服、利上げ休止期待、米国の株価反発などにより、底堅さが示される可能性もある。

＜米国企業の決算発表＞

米国株市場では、米企業による決算発表が残されている。今週はITハイテク関連の主要企業などが予定されている。4月14日前後からの決算発表は強弱混在ながら、平均として懸念されたほどの悪い内容となっていない。今週以降も決算発表の内容が事前織り込みの範囲内であれば、米国株の上昇やクロス円主導でのリスク選好による円安と外貨高が支援されやすい。

ただし、米国株市場ではITハイテク株などを中心に、すでに利上げ停止期待などで買い戻しが進んできた。やや期待先行の米株反発となっており、今週以降の決算発表では改めて現実の厳しさが再認識される可能性もある。失望の場合は、ドル全面安や円全面高という波乱余地も残されている。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。